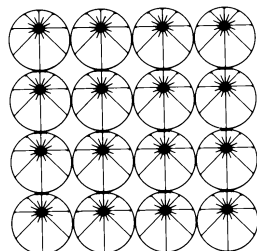


## 巻頭言



### アンリツテクニカルへの想い

常務執行役員 R&D 本部長

小野 浩平



本誌アンリツテクニカルは、1957年(昭和32年)10月に安立テクニカルとして発刊され、以来約50年、本刊で83号となる。2003年(平成15年)3月に81号が刊行されるまでほぼ半年ごとに刊行されてきた。しかし、82号が刊行される2006年(平成18年)3月まで丸3年の間、通信バブル崩壊からの体力回復に全力を注ぎ、やむなく休刊としてしまった。自らの力不足を思う一方で、本誌50年の歴史を想い、その重みを振り返りつつ、情報通信分野に経営の基盤を置く者として、当分野の歴史と今を考察し、更に本誌への想いを語ってみたい。

本稿を執筆するに当たり、図書室に足を運び安立テクニカル発刊第一号を手にとってみた。



当時の田尾本 政一社長は次のような発刊の言葉を述べている。

『われわれの産業は一にも技術、二にも技術である。工場の生産はいわゆる4M—即ち人、金、材料、機械の投入により、量的には比較的短時間内に増強出来るが、質的増強の根幹はあくまでも技術であり、... 中略...』

このたび発刊の安立テクニカルが、内にはわが社の技術の根や幹や枝の発育の大いなる糧となり、外にはわが社製品に対する技術サービスの完全な役割を果たして... 後略』

当時からの技術重視、顧客重視のサービス提供と言う視点は、現在の経営理念・ビジョンに掲げる「オリジナル&ハイレベル」、「知の製造業」として引継がれており、先見性に敬服する。また、発刊期の数々の論文から1957年当時、戦後の混乱に終止符を打ち、復興から新たな成長に向けた意欲を強く感じ取ることができる。当時の、年間売上12億円、営業利益1.3億円の企業が、掲載論文10編の論文誌を発行したことを思えば、更にその想いを強くする。

50年前の発刊当時と現在との中間地点、25年前の1980年代初頭(昭和50年代後半)のアンリツテクニカルを紐解いて見ると、光通信の技術革新と発刊当初から脈々と続くインフラストラクチャー充実への情熱が、論文の端々に見て取れる。折りしも、「そのような大容量の回線を使ってど

の様なサービスを提供するのか」との質問を突き付けられながらも、400Mbit/s の伝送速度を有する日本縦貫光伝送路が敷設された。執筆者達は自ら開発した光通信測定器を以って国内インフラ充実に貢献しようとする意気込みと、グローバルな事業展開への意欲がみなぎっていた。

そして、更に 25 年後の現在、通信産業の大きな流れは、整備し尽くされたと言って良いほどのインフラ上に繰り広げられる、多面的サービスの提供に向かっている。あの通信バブルは、インフラの充実に精魂を掛けてきた人たちの見た、正に泡沫(うたかた)の夢であったのかも知れない。

サービス化の大きな流れの中で、本誌も変革の途上にある。自然真理の探究の部分、つまりハードウェアの基礎研究は減少傾向にある。一方で、人が決めた約束事であるプロトコルやアプリケーションに関する論文が増加傾向にあり、従来とは異なるこの分野に能力を発揮する若い技術者を散見できる。製品やサービスを世に出し、その成果を本誌掲載によりまとめ上げ、お客様へ提供できる価値とそのコンセプトを広く知らせることの喜びを、若い技術者、研究者に味わってもらいたい。それらの努力が、顧客へ提供できる価値、アンリツの企業価値、更に執筆者自身の価値向上に至ることも含めて。

「前人木を植え、後人涼を楽しむ」

発刊 50 年の今の時に、アンリツテクニカルが発行に携わるものとして前人の業績を思いつつ、次の 50 年に繋がる価値と情熱を読者の皆様に伝えて行きたい。